

● 竹林を知り尽くした研究者

竹を無駄なく利用

「竹の茎の表皮部分だけではなく、幹やその他の部分を使った製品も開発しよう」。タケックス・ラボ社長の清岡久幸は決意した。

竹の性質については知り尽していたし、研究データの蓄積があったため約1年で新製品の開発に成功。05年には発売へこぎ着けた。新製品はフローリング材「タケックス・フローリング」や、天井や壁に利用する「タケックス・ファイバー」といった建築材料。竹

ことから、断熱・吸音効果や消臭効果もある。これらを開発によって竹を無駄なく利用できるようになり、コストダウンに成功した。

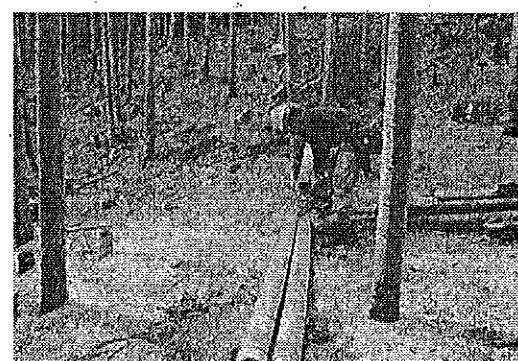
姿勢を明確に

06年10月には竹の総合活用企業を目指して、社名を「タケックス・ラボ」から現在のタケックス・ラボへ変更。

「過剰に存在する竹の使

良い物を選ぶ母親の視点

主力の食品添加物に「だわらず、幅広い分野で竹にかかわっていく姿勢を明確にした。約60日間で20㌢に成長する孟宗竹をはじめ、すべての肉質が微細多孔体である。主な食品添加物に「だわらず、幅広い分野で竹にかかわっていく姿勢を明確にした。約60日間で20㌢に成長する孟宗竹をはじめ、すべての肉質が微細多孔体である。主な食品添加物に「だわらすと同時に、植物の生態系を回復させたい」。清岡がそう考えるのは自然のなりゆきだった。竹の葉はバイオマス燃料、幹は建材、表皮は食品添加物にそれを利用できる。竹害で悩む自治体などへ、竹を有効



驚異的な成長速度の竹は、一方で生態系を壊す要因となる

株式上場も視野

「竹のバイオニアでありたい」。清岡はきっぱりし

た口調で語る。今後は製品のさらなる普及を目指すとともに、株式の上場も視野に入れている。

▲ 清岡は強調する。食品添加物にしても発がん性試験も実施。また、後継者についても、その時、その時に合った人が経営してくれればいい」とあっさりと語る清岡。ただ、開発に関しては「母親の視点を引き継いでほしい」と熱心に言う。

「開発理念が浸透するよう、日々これから繰り返し、取り組んでいった」。清岡は笑う。竹のバイオニアとして、やれる」とはたくさんある。タケックス・ラボの姿だ。子供を守るのを使ひ、挑戦は始まったばかりだ。

めだた

い道を提案して消費量を増やすと同時に、植物の生態系を回復させたい」。清岡がそう考えるのは自然のなりゆきだった。竹の葉はバイオマス燃料、幹は建材、表皮は食品添加物にそれを利用できる。竹害で悩む自治体などへ、竹を有効

活用するノウハウを提供。根柢にあるのは、自分が竹を総合的に活用するパイオニアとして竹害解決にも取り組んでいた。

入院したときに見た入院中の子供たちを看病する母親の姿だ。子供を守るのを使ひ、命とし、子供のため良い品物を選んで与える。そんな（敬称略、この項おわり）

加えて「企業の視点では母親目線で不足のない製品を取り組むのが開発理念」と発理念とした。

勝つ

タケックス・ラボ
④